

# 全史協四国通信

平成29年度



上級武士居住区(上)と家臣団居住区(右)



## 国指定史跡 湯築城跡 - 愛媛県松山市 -

湯築城跡は、中世伊予国の守護であった河野氏が、南北朝期から戦国期（14世紀後半～16世紀末）まで、約250年間にわたって居城としていたもので、石垣や天守がなく、地形を利用して築かれた「平山城」で、周囲に二重の堀と土塁を巡らせています。

発掘調査は昭和63年から開始され、公園南側を中心に約20,000㎡が調査され、豊富な出土遺物とともに、城内が機能や格式により「家臣団居住区」「上級武士居住区」として使い分けられていたことが明らかとなりました。

その後、中世城郭としての重要性や、守護大名の拠点城郭である点などが評価され、平成14年9月20日に国の史跡に指定されました。

# 1. 平成29年度事業報告

## ①全史協四国地区協議会総会

- ・日 時 平成29年8月24日（木）13:30～14:10
- ・会 場 サザンシティホテル クリスタルホール（南国市明見933番地）
- ・開会挨拶 四国地区協議会会長  
松山市長 野志 克仁
- ・開催地挨拶 南国市長 平山 耕三
- ・来賓挨拶 文化庁文化財部記念物課  
文化財調査官 山下 信一郎  
高知県教育委員会文化財課  
課長 土居 靖幸  
埋蔵文化財担当チーフ 今田 充
- ・議 事  
第1号議案 平成28年度事業報告及び決算報告について  
第2号議案 平成29年度事業計画案及び予算案について  
第3号議案 役員を選任について  
第4号議案 平成30年度（第23回）総会の開催地について
- ・閉会挨拶 平成30年度（第24回）開催地



## ②記念講演会

- ・日 時 平成29年8月24日（木）14:20～16:30
- ・会 場 サザンシティホテル クリスタルホール
- ・内 容  
記念講演 文化庁文化財部記念物課  
文化財調査官 山下 信一郎  
「古代官衙・寺院跡等の整備活用をめぐる現状と課題」  
事例報告 南国市教育委員会生涯学習課  
油利 崇  
「史跡土佐国分寺跡の調査について」



## ③視察研修

- ・日 時 平成29年8月25日（金）9:00～12:00
- ・場 所 土佐国分寺跡（国史跡）、前浜掩体群（市史跡）

## ④研修派遣補助

- ・平成29年度文化財担当者専門研修「災害痕跡調査課程」（5日間）…西条市
- ・平成29年度文化財行政講座（文化庁主催）（3日間）…今治市
- ・平成29年度第2回埋蔵文化財担当職員等講習会（3日間）…西予市



## ⑤全国史跡整備市町村協議会臨時大会及び文化財関係予算陳情

- ・日 時 平成29年11月1日（水）8:30～
- ・場 所 ホテルニューオータニ ザ・メイン「芙蓉」

## ⑥全史協四国通信発行 ・刊行 平成30年3月

## 2. 研修派遣補助実施報告

### 平成29年度文化財担当者専門研修「災害痕跡調査課程」報告

西条市教育委員会社会教育課 渡邊 芳貴

日時：平成29年7月24日～7月28日

場所：奈良文化財研究所

#### 1 研修内容

##### ○『災害痕跡調査課程のねらい』 山崎 健（奈良文化財研究所）

研修参加者各自が研修に参加した目的を発表し、課題を明確にする。

##### ○『地震痕跡』 三村 衛（京都大学大学院工学研究科教授）

「地震と地震時の地盤挙動」と「発掘調査時における地震痕跡」について講義を受ける。

前半では、地震発生メカニズムや地震により発生する現象について学んだ。特に液状化現象は発掘調査において確認できる特徴的な痕跡であり、その原理について詳しい解説があった。

##### ○各地の事例報告 齋野裕彦（仙台市教育委員会）、田中広明（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）、村田泰輔（奈良文化財研究所）

各地の調査事例等の講義。

齋野氏は仙台平野を中心に津波痕跡の事例、田中氏は埼玉県の古代地震痕跡の事例を紹介された。村田氏は火山活動について、その基礎的な定義から始まり、遺跡で確認できる情報についての講義であった。3氏ともに共通する視点は、災害埋蔵文化財行政がいかに社会貢献をしていくかということである。

東日本大震災後、2011年6月に「津波対策に関する法律」が制定され、同年9月の防災中央会議では、地震・津波の発生メカニズムの解明等の調査分析に「地震学だけでなく、地震学・考古学・歴史学等の統合的研究の充実が必要である。」と報告されている。

地中の状況を幅広く把握できるのは考古学（埋蔵文化財調査）であり、自然科学の分野と協力しながら、正しく災害痕跡を評価しないといけない。しかし、考古学の対象が人類の活動痕跡にあり、自然災害の痕跡のみの調査では予算や期間を十分に取れないという問題もある。自治体の中で理解を求めていく必要がある。

##### ○『第四紀学と考古学』 趙哲済（大阪文化財研究所）、竹下欣宏（信州大学教育学部准教授）

災害痕跡の調査を含め、遺跡の環境を理解する前提として必要な地層学の基礎知識を学んだ。また、それらを調査でどのように活用していくのか、実際の事例等を用いながら講義が進められた。

##### ○『地理学』 小野 栄介（新潟大学教育学部准教授）

地理学と考古学の協働による震災痕跡調査の事例について学んだ。試掘調査が重要である。周辺環境を理解したうえで、遺跡で起こっている現象を考えていかなければならない。

##### ○実地研修 中条 武司（大阪市立自然史博物館）、趙哲済

大阪市立自然史博物館において、各地の剥ぎ取り遺構（津波痕跡・地震痕跡等）を材料として、堆積環境の検討を行った。前半は講師が幾つかの事例を説明し、後半では受講者がそれぞれ剥ぎ取り遺構を担当して、プレゼンテーションを行い、参加者での議論が行われた。





## ○災害痕跡調査の現状と課題

今回、地質学や地理学の分野の基礎を学んだが、それらと考古学との対象範囲はスケールが違いすぎる。それを理解したうえで協力体制を構築しないと、成果は上がってこない。また、防災・減災の分野で考古学の役割についての説明があった。

今後、これに対応できるよう早急なマニュアル作りが求められる。奈良文化財研究所は「災害の軽減に貢献するための地震火山災害観測研究計画」の考古学の拠点として、現在データベース作成等を進めている。今後、各自治体に様々な協力を要請していくことになると思う、とのことであった。

## 2 所感

埋蔵文化財調査は文化財保護法の下、実施に際しては、その費用も含め原因者に理解と協力を求めている。したがって、調査では可能な限り現地に残された情報を明らかにし、その成果を社会に還元しなければならない。

今回の研修テーマである「災害痕跡調査」は、東日本大震災以降、防災を考える上でさらに注目を浴びている分野である。これは埋蔵文化財調査成果の中で、最も目に見える社会貢献のかたちとなるのかもしれない。その一方で、現場において間違った認識をしてしまうと、それがそのまま違った防災対策に利用される可能性もある。

今回の研修では、地質・堆積学等の基礎を学ぶとともに、災害痕跡調査の現状と課題を学ぶ機会を得た。災害痕跡調査は、世間での注目スピードに比べ、その調査・研究手法はまだ途上であり、研究者間での十分な共通認識や理解がなされていない部分もあることを知った。また、災害痕跡を理解する上での前提となる地質学等の基礎、災害のメカニズムや現場での注目点・注意点を学ぶことにより、災害痕跡調査の入り口に立つことができた。

しかし、地質学・堆積学等の自然科学分野に対して、自分が素人であるという事を忘れてはならない。今回の研修を活かし、現地に残された情報をしっかりと読み取る努力をすることや、客観的な記録を残すことは勿論であるが、他の専門分野の人間との協力関係を構築しながら、調査成果の還元という社会的義務を果たしていきたい。

## 「平成29年度文化財行政講座（文化庁主催）」報告

今治市教育委員会文化振興課 橘 慶彦

日時：平成29年11月27日～11月29日

場所：旧文化庁庁舎6F 会議室

本研修は、文化財行政予算や活動内容といった全般的な内容及び、近年の文化財行政を取り巻く環境の中で、どのように文化財を保存・活用していくかを主題として開催されており、平成29年11月27日から29日までの3日間参加させていただいた。

さて、文化財行政は保存・活用を目的として様々な取り組みを行っているが、そのシステムを複雑にしている点はまず、対象となる文化財のジャンルの多さがあげられる。一口に「文化財」と言っても、その内容は大まかな分類としても「有形文化財」「無形文化財」「民俗文化財」「記念物」「伝統的建造物群」「文化的景観」…と多岐にわたるうえ、その一つの中でも、例えば有形文化財の中でも絵画や建造物、彫刻、工芸品など、それこそもののサイズから使用される材料など、全く異なるものである。そのため、保存といっても必要とされる技術・設備などは種々あり、専門的な知識を有する職員に限られ、対応しきれない現状が多々見受けられる。

今回の研修では、各分野の制度について詳細な説明があり、各分野における保存・活用での留意点や問題点、特に近年多発する地震や台風といった自然災害、また落書きによる器物破損・盗難といった犯罪も含め、どのような保護体制を構築していくのか？その上で行政の役割を再度見直すきっかけになった。



また、近年では保護活動として、文化財の保存・活用を両輪として重視する傾向がある。これまでの保存環境だけでなく、状況に応じた活用についても考えなければならない時期になり、従来の保護活動のままでは十分な環境とは言えない状況を迎えている。

## ●講演「観光立国と実現するための文化財の在り方」

デービッド・アトキンソン（小西美術工藝社社長）

氏の講演では、文化財の保存と活用が文化財保護の両輪として機能するためには、まず「なぜ外国人目線での整備が必要なのか」について考えることが重要であると述べている。

現在、我が国の外国人観光客数は当初の目標を大きく上回り、オリンピックイヤーである2020年までに4千万人の訪日外国人を迎える体制作りを行っている。日本中の自治体でまだまだ課題が多く見受けられるが、現状ではその目標はオリンピック自体の効果もあり、おそらく達成できるものと考えられる。では、順調に「観光立国」として整備されているかと言えば、実際はそうではない。「訪日外国人観光客の増加を一過性にしないために必要なものは『文化財の活用』である」とデービッド氏は述べられている。

まず第一に、訪日外国人観光客が何を求めているかという点では、文化財を訪問の目的としている外国人は、「文化に触れる」ことを重要視しているのである。「文化に触れる」とは、目の前の文化財がなぜそのような表現方法であるのか？どのような環境・歴史のなかでどのような意味を持つのか？などを知ることである。とりわけ、日本人の対外国人対応としては、ローマ字表記のみの解説整備であることが多く、寺院・城などの建立・築造が何年…などの数字上のデータを表記するのみで、「なぜその名前が付いたのか？」「なぜそのような形状なのか？」「それが歴史上どのような意味を持つのか？」「ほかの文化と一体何が違うのか？」などには言及されておらず、実際の整備はまだ不十分と指摘されている。

このような訪日外国人観光客の要求の高さは、観光客の出身地との距離が関係しているという。資料でも示されたが、訪日外国人の多くは中国・韓国など東アジア出身の方が多い。ただし、滞在日数や消費額はそれほど多くなく、逆に東アジアから欧米などへ渡航する観光客は、日本滞在よりも多くの滞在日数と消費活動を行うという。

この実態は、日本に「求心力」がないというのではなく「距離」、つまり、「めったに訪れることが出来ない」ことが要因にあげられる。わざわざ訪日しておいて、ただ興味のある分野を見るのではなく、歴史を知る・理解するために妥協する観光客はいない、とのことであった。対策としては、ただ単純に英訳するだけではなく、外国人の意見を参考に説明文を作成し整備を進めることで、はじめて観光客の満足度を高め、経済活動としても計算できる「文化財の活用」となるのではないかと、とのことであった。

また、外国人目線での整備が重要とはいえ、国内の文化施設を最も多く利用するのは日本人であり、このような整備が地元で理解されるのか？必要なのか？という疑問もあったが、デービッド氏は「これらの恩恵を受けるのは日本人である」との回答であった。つまり、日本の文化財は多くの場合、その内容を察することで説明省略することが多いが、実際にはその内容すべてを理解している訳ではなく、来場者の多くが、「より深い内容を知りたい」というニーズを持つからだとして述べている。

文化財の「保存」と「活用」はそれぞれ独立ではなく、相互に影響し合わなければならない。適切に活用し、経済効果を生むことで保存のための費用を創出し、また資源として活用できるように行うことで、無理のない保存計画を策定できるようになる、との話があった。

文化財の保存・活用には多くの専門的知識・費用・環境整備など様々な課題が山積するが、日本の文化が世界的に注目されている今だからこそ、より本質的に保存することの意味と、いかに文化財行政に携わっていくかを考えさせられた。また、この研修で得た知識・観点を活かし実践に結びつけたと思う。

## 新規加盟のお誘い

未加盟市町村におかれましては、「四国はひとつ」と捉え、文化財整備活用の充実のためにも、全国史跡整備市町村協議会四国地区協議会にご加盟いただければ幸いです。加盟に関するお問い合わせは事務局までご連絡ください。加盟市町村におかれましては、未加盟市町村の加盟促進に向けて積極的に働きかけていただきますよう、お願い申し上げます。

### ①講義1「埋蔵文化財保護行政の現状と課題」

禰宜田佳男（文化庁記念物課主任文化財調査官）

文化財保護法の改定について、市町村は、域内の文化財の総合的な保存・活用に関する計画を策定できるようになること、個々の文化財の「保存活用計画」を制度上に位置付けることについて述べられた。また、保存と活用は両輪であり、保存あつての活用であることを肝に銘じ、活用に傾きがちな現状に歯止めをかけるよう求められた。今後、少子高齢化が進み、発掘調査が減少する時代の埋蔵文化財行政について、広い視点で短期的・中長期的な展望を持つこと、埋蔵文化財行政の基礎は発掘調査に基づく情報発信・調査・研究であり、継続的な調査研究が重要とされた。



### ②講義2「埋蔵文化財行政におけるデジタル技術の導入について」

近江俊秀（文化庁記念物課文化財調査官）

現在、アナログフィルム・カメラの衰退、現像所の減少、原稿のデジタル化が進行している。デジタル化の問題点として、必要な情報を取得できる精度をもった機材の確保に費用がかかる点、記憶媒体の更新が必要となる点、データ容量が大きさや消失・破損の恐れから長期保存のためのシステム構築と人員育成が必要となり、維持管理の費用がかかる点が挙げられた。

今後の指針として、フルサイズデジタルカメラの利用を推奨、発掘記録の長期保存のため専用のパソコンで生データからTIFF形式を生成すること、データのバックアップ、将来のデータ容量の増加を見込んで保管のための必要な機材・体制を構築すること、そのための予算確保をすること等が示された。個人的には、そのための国庫補助も考えてほしいところである。

### ③「熊本地震からの復興に向けて」

長谷部善一（熊本県教育庁教育総務局文化課）

昨年度に発生した連続する大規模地震の文化財の被害と対応について述べられた。埋蔵文化財の記録保存調査は行政措置の一環であり、復興事業と共存可能とのことである。このような災害に対応するため、高精度遺跡地図の作製、開発部局との事前の連絡調整が重要とされる。また、復興調査での公開活用、特に現地説明会を行うことにより、地元住民の意識を高めている。



### ④「原発事故からの復興に向けて—南相馬市—」

川田強（南相馬市教育委員会文化財課）

南相馬市は、福島第一原子力発電所事故の計画的非難区域となっている。そのため、防潮堤・中間貯蔵施設・民間の土砂採取事業などの復興事業の増加により、発掘調査件数が増加し、製鉄遺跡が多数確認されている。当初、埋文職員が仮設住宅の対応に回されたが、包蔵地情報の提供によりスムーズな建設をすることができた。市民検討会で、史跡整備を復興のシンボルとして期待するという意見が多数あり、まさに「地域の復興のための文化財」となった。

### ⑤講演「埋蔵文化財の保存・活用と地域研究の役割」

坂井秀弥（奈良大学文学部教授）

活用により、国民・市民と地域・文化財を繋ぐためには、専門家による調査研究・地域研究が不可欠である。適切に地域研究が出来ていれば、文化財として重要なものが分かる。また、現代の人々が身近に感じるのは、近世以降のものであり、様々な時代のものをトータルに保護し、一体的に活用する必要あるとのことであった。



## ⑥基調報告1「福岡県における埋蔵文化財活用と地域研究」

吉田東明（福岡県教育庁文化財保護課参事補佐兼企画係長）

## 基調報告2「史跡五斗長垣内遺跡の活用と地域研究」

伊藤宏幸（淡路市教育委員会教育部長）

## 基調報告3「島根県における活用の取り組みと地域研究」

丹羽野裕（島根県教育委員会文化財課長）

## 基調報告4「浜松市における地域研究と活用」

鈴木一有（浜松市市民部文化財課主幹）



埋蔵文化財行政と研究との関わりについて、それぞれ報告を受けた。特に注目したのは淡路市教委・伊藤氏の報告であった。弥生後期の鍛冶炉が検出された五斗長垣内（ごっさかいと）遺跡において、弥生鍛冶実験を市教委主催で行い、一般公開して市民も参加したとのこと。この「一緒に学ぶ」イベントを契機に、遺跡の周辺環境・地域の歩みを見直す機会となり、ちょうど「地域おこし」を企画したかった住民の主体的な学びへと発展した。まさに、住民の関心に市が「地域研究」の成果で答えた結果であった。さらに、地域主体のイベントや多岐にわたる地域活動に発展し（Cafeまるごとキッチン・ごっさたまねぎ祭り・まるごとたまねぎ復活プロジェクトなど）、その後定着した。

このような住民の自主的な動きを起こすためには、地域と行政の距離感が重要で、全て行政でやってしまっただけではいけない、ということであった。

島根県・丹羽野氏の報告では、文化財部局が孤立せず、地域研究の成果を首長部局にうまくプレゼンし、連携しながら埋蔵文化財行政を進めている様に感嘆した。

浜松市・鈴木氏の報告では、少ない人数で実に多様な活動を行っていることに驚いた。浜松市は発掘調査を民間調査組織に委託して行っているが、報告書作成は自前であり、報告書作成時には、今後の活用を見越した図・写真・考察の作製を行っているとのこと。活用において様々なアイデアを実行に移しており、浜松城跡の土日の公開発掘、三角縁神獣鏡チョコの作製、縄文土器（長野系・静岡系）を観察して土器クッキーの作成、大河ドラマ制作に便乗して、井伊氏関連文化財の調査・パンフレット作製など印象に残った。特に三角縁神獣鏡チョコについては、イベントで調査研究、食用シリコンで型を取り製作するものであるが、弁護士と相談し、あくまで「鋳銅の技術確認が主で、チョコを素材として利用しているだけ」というスタンスで食品を扱うイベントの開催に成功している。

## ⑦シンポジウム「埋蔵文化財保護行政における保存と活用」

シンポジウムでは、埋蔵文化財の活用のためには、常日頃の地道な活動と地域研究が重要であることが強調された。一つ一つの遺構を掘っていく中で生じた問題意識や疑問を、報告書の段階で周囲の遺跡や歴史をみて研究・体系化し、調査成果を地域に還元するとともに、役所の中で研究が許される雰囲気醸成する必要がある。

地域研究の成果を地域に還元する際には、「一緒に学ぶ場」を設定し面白さを伝えるとともに、地域の人が常に持っている疑問「何が知りたいのか」を引き出し、解決するための取り組みを提供することが重要である。そうすると、次第に「自分たちの住むところを見直したい。調べていこう」という、行政の押し付けでない住民主体の取り組みが発生するとのことである。

文化財は「地域」と結びつくものである。「観光のネタにならないものは要らない」ということにならないよう、保存を行いながら、如何に市長部局と連携していくか。そのためには、役所内における分かりやすい市民感覚の説明、つまりプレゼン能力が求められるとされた。さらに、女性の感性と視点（「かわいい」）を取り入れる必要があるという意見もあった。

## 2 視察研修 -国史跡・吉武高木遺跡、奴国の丘歴史資料館、国史跡・板付遺跡-

吉武高木遺跡は、弥生時代の特定集団墓、大型掘立柱建物跡などが検出された遺跡である。ここで注目されるのは、レプリカを貼り付けた立体看板である。青銅武器類や絵画土器などのレプリカが埋め込まれ、実際に触れることができるようになっていた。また、透過解説板で実際の位置に大型建物跡の復元をみることができるのも興味深かった。

その他、奴国の丘歴史資料館における甕棺や祭祀場・掘立柱建物跡の露出展示（本物）、板付遺跡の展示館において、地元小学生によるパンフレットなどが目に付いた。



### 「有識者招へい旅費補助金」のご案内

今年度より、加盟市町での有識者の現地指導に要する招へい旅費について、予算の範囲内にて補助金を交付する「有識者招へい旅費補助金」制度を設けております。

補助金の交付対象となる事業は、(1)埋蔵文化財発掘調査事業、(2)出土物整理事業、(3)その他の文化財修復及び保存事業、(4)史跡等の保存整備活用事業、が該当します。1件につき10万円を上限とし、先着順で年間2件（加盟市町につき1件）としております。

なお、補助金の詳細については、事務局までお問い合わせください。

### 全国史跡整備市町村協議会四国地区協議会とは

全国史跡整備市町村協議会（全史協）加盟市町村とこの会の目的に賛同し、文化財の所在する四国地区の市町村をもって、平成8年8月に結成された団体です。加盟市町村が協調し、文化財の保護に関する調査研究やその具体的方策の推進を図りながら文化財の保存と活用に資することを目的とし、文化財の保存整備と公開活用が円滑に、また適切に行われるよう、文化財に関する情報交換、研修派遣補助事業、国への予算要望の取りまとめや陳情等の活動を実施しています。

#### 【加盟市町一覧】

(香川県) 高松市 さぬき市 丸亀市 三豊市  
(徳島県) 徳島市 阿波市 美馬市 藍住町 石井町  
(愛媛県) 松山市 今治市 宇和島市 大洲市 西予市 西条市 松前町 松野町  
(高知県) 高知市 南国市

#### ○編集後記○

平成29年度全史協会誌をお届けします。

会誌作成にあたり、ご協力いただいた皆様に対しまして御礼申し上げます。本年度は、南国市にて総会が開催され、開催地の皆様の格別のご支援をたまわり無事に終えることができました。心より御礼申し上げます。

近年、研修報告にもあるように文化財の「保存」と「活用」の在り方が問われています。本協議会でも加盟自治体と情報共有を図りながら、より良い文化財保護の在り方を模索していければと考えております。

最後になりましたが、今後も全史協四国地区協議会活動の充実のため事務局として努力してまいりますので、引き続きよろしく申し上げます。

平成29年度 全国史跡整備市町村協議会  
四国地区協議会誌

発行日 平成30年3月30日

編集・発行 全史協四国地区協議会事務局

〒790-0003

愛媛県松山市三番町六丁目6番地1

松山市教育委員会文化財課内

TEL 089(948)6605 FAX 089(931)6248

e-mail [kybunka@city.matsuyama.ehime.jp](mailto:kybunka@city.matsuyama.ehime.jp)